

色即是空 空即是色

「色は即ち空、空は即ち色なり」 この言葉は、般若心経の一節です。「色」はサンスクリット語では「ルーパ」といって、色と形があるものです。つまり、一切の物質的存在は、固定的な、これはこれだという実態がないということです。私たちが目にする現象世界は、本来何もないものであり、本来何もないものが色々な縁・条件が重なるとかたちになるということです。

たとえば、台風というものは何もないところから気候変動によって海面の温度が上昇したりして発生するもので、もともとは台風という存在は無いのです。

又、同じように紙というものは、概念としてあるけれど紙という存在はないのです。(色即是空)

紙はパルプからできているわけですが、木がなければ紙はできません。木が育つには、雲が出来なければ雨は降りません。太陽の光をはじめいろいろな条件が整ってはじめて木は成長するのです。そして、木をパルプにするには、木を伐採する人がいなければなりません。ですから、紙になるまでにたくさんの工程を経なければなりません。(空即是色)

お釈迦様の唱えられた縁起というものは、あらゆるものは、原因とそれを助ける縁とによって成り立っているのです。それ自体として他のものとの関係なしに存在しているのではないのです。要するに、私たちが普通存在しているものは概念でしかないという事です。

「無常」とは、一切のものは移り変わっていて、存在しているものは、刻々変化しているので永遠に変化しないものはないということです。

人間はどうしても私は私だという固定観念にとらわれてしまいがちです。仏教の言葉でいうと「自我」あるいは「エゴ」で、苦悩の原因とされるものです。しかし、「我」とか「概念」というものは、社会生活を営むには、共通認識を持つために必要なものです。ですから、どちらにもかたよらない、こだわらない、とらわれない心をもって私たちの生命の在り方を深く見極めることが大切なのです。